みんなちがって みんないい～（その１２）
～共生社会をめざして～

今回は、私が経験した「難聴特別支援学級」における取組及び子供たちから学んだことについてお話します。

特別支援学級担任は、通常学級の担任と同様、４月当初から学級の子供の実態を把握します。授業中や休み時間等の観察や保護者からの情報を元に、子供自身ができることや得意なこと、苦手なことなどについて把握し、その子の長所を生かしながら、苦手なことを克服することができるように、学習指導計画を立てます。

以前、私が担任していた難聴特別支援学級に在籍していたのは、１年生の１名でした。明るく前向きな性格で、笑顔で職員や友達と関わることができる子供でした。この子の聞こえにくさに両親が気付いたのが、３歳児検診前だったそうです。兄の発育と比べ、言葉の理解と明瞭な発声の遅れが気になり、検診で相談し、そこから医療機関につながり、「伝音難聴」であることが分かりました。

２週間ほどの観察や情報から、何事にも意欲的に取り組むことができる力と、発音の不明瞭さや理解できている言葉の少なさ、そして、そのことが原因で他者とのコミュニケーションがうまく取れないときがあるなどの課題がはっきりしました。そこで、「自立活動の時間（※１）」を中心とした、長所を伸ばし、課題を克服することを目指した学習計画を立てました。

語彙を増やすために、絵カードや写真とそれらの意味を表す文カードを用意し、絵合わせや神経衰弱のようなゲームを行いました。また、聞き取りにくさや発音の不明瞭さを改善するために、難聴特別支援学校の先生から指導していただいた「ストローを使用した発声練習」、平仮名の五十音表を担任と一緒に読むなどの活動に取り組みました。これらの活動に取り組むことで、日常生活で使うことができる語彙が増え、特定の発音の不明瞭さが軽減されました。

また、交流学級で自分の考えを発表する機会を多く設けました。人との関わりを楽しむことができる子供だったので、友達との話合い活動にも意欲的に参加することができました。友達が難聴の子の考えや気持ちを想像し、代わりに答えるなど、子供たち同士の関わりの中で語彙を増やしたり、正しい受け答え方を身に付けたりすることができました。

難聴の子供だけでなく、周りの子供たちにとっても、他者を思いやり、どのように行動するとよいかという点について、体験を通して学び、身に付けることができました。それとお互いに感謝の気持ちも育ち、居心地の良い学級で１年間過ごすことができたこともありがたいことでした。

私が「難聴特別支援学級」の子供と関わりの中で学んだことを以下に述べます。

・自分の口形を意識させ、発声する活動を繰り返すことが、耳の聞こえにくさを抱えている子供にとって効果があった。
・日常生活で使う言葉について、できるだけ具体的な写真や絵と、その言葉（文字）を見せて、発声する活動に楽しく取り組むことも、課題克服に向け有効であった。
・子供同士で話し合う活動を通して、どの子も成長することができた。
・周りの子供たちへ、「障がいをもっている子供」について理解することができるように、その子への接し方や言葉の掛け方などについて、具体的に指導することは、将来的に社会で多様な人との関わり方を身に付ける点において効果的であると強く感じた。

最後に、その他の支援について紹介します。

耳の聞こえにくさがある子供が、教室や運動場などたくさんの人がいる場では、「ロジャー（デジタルワイヤレス補聴援助システム）」を使用することは、その子にとって、必要不可欠な支援となります。また、場合によっては、椅子の下の部分にテニスボールなどをはめ込み、できるだけ余計な音が出ないようにすることも大切な支援の一つです。

※１　自立活動の時間・・個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識・技能・態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培うための学習活動

（文責　特支ＣＯ　山下　健一）